

日露戦争と対馬

原田 博夫

はじめに

今回の対馬訪問では、釜山からのフェリーで対馬北部の比田勝港に入り、宿泊地の対馬南部の巖原に向けてバスで国道 382 号線を南下した。行程の三分の二を過ぎたところで、万関橋に差し掛かり、眼下に万関瀬戸を見ることとなった。その海拔からの高さと同河の巨大さには圧倒された。

そもそも現在の橋は 3 代目で、平成 8 年(1996)に架け替えられたものだが、明治 32 年(1899) 3 月の工事設計によれば「幅約 7.2 メートル、深さ約 3 メートルの掘割」とあるから、当初は、現在より小ぶりの運河と橋がかかっていたようである。その後、第 2 代目の橋は昭和 31 年(1956)に架け替えられ、バスの通行も可能になった。さらに運河それ自体は、昭和 49 年(1974) 7 月に開発保全航路に指定され、翌年 3 月に幅 40 メートル・深さ 4.5 メートルに拡張された。その後も航路の再拡張が計画されるも実現はしていないが、現在の第 3 代目の橋は、実はこの再拡張計画に沿って設計されたため、海面からは目くらむばかりの高さとなったわけである。

ともあれ、そもそもこの運河を開削するに至った背景である、明治期後半のわが国を取り巻く国際政治・軍事情勢の逼迫振り・緊張状態に想いを馳せたことが、本稿に至った経緯である。

『坂の上の雲』と対馬の人々

対馬南西部の浅茅湾と対馬東岸の三浦湾を結ぶ久須保水道（日清・日露戦役当時の呼称で、現在は万関瀬戸）の開削工事は、明治 32 年(1899)～明治 34 年(1901)である。この時期から推定されるように、この水道開削は、日清戦争（明治 27 年(1894) 7 月～明治 28 年(1895) 11 月）と日露戦争（明治 37 年(1904) 2 月～明治 38 年(1905) 9 月）を挟んだ時期である。おそらくは日清戦争での賠償金を基に、来るべき日露戦争への備えとして、計画されたものと思われる。

この万関橋を見学した際、私は直ちに、これだけの規模の工事を対馬で進めていけば、おそらく対馬の人々には官民を問わず、政府が何を意図して準備しているかは、知れ渡っていたのではないかと考えた。すると、司馬遼太郎が『坂の上の雲』（文藝春秋、1972 年 9 月、巻六）で印象的に描いた、ロシア・バルティック艦隊が日本に向けて北上する途中で遭遇した純朴に

して従順な島民からの「敵艦見ゆ」の通報の顛末・エピソードは（雨風の中必死で伝えようとするも、その手段が古色に過ぎ、現実的には数日遅れで伝わった形跡に留まる）、僭越ながら、事実誤認あるいは壮大なフィクションなのではないか、と疑問に思った。そもそも、これだけの大工事をしている対馬で、島民・漁民が開削工事の狙いを知らぬはずはないし、外部（本土）・役所などへの連絡体制も、工事事務所などもあったはずなので、それほどまでに途絶していたとは思えないからである。そして、再度『坂の上の雲』を手にとってみた。

その結果、私の記憶は大いなる間違いで、ロシア艦隊を最初に発見したのは沖縄・宮古島の漁民であった。それは明治38年（1905）5月26日朝で、その日は「曇天、南風が烈しかった」。宮古島の島司・警察官へ彼の通報は、東郷艦隊の哨戒艦信濃丸が発した有名な「敵艦見ゆ」の第1報の発信（5月27日午前4時45分）よりも、20時間も早かった。しかし、この大発見は、当時の日本の統治機構・運営の堅牢さと情報伝達手段の制約下では、現実的には活かされることはなかった、という次第である。という訳で、一時にせよ、司馬遼太郎に事実誤認の汚名を着せようとした、わが無知蒙昧と厚かましさに恥じ入るばかりである。

日露戦争と久須保水道（万関瀬戸）

こうして、「敵艦見ゆ」の第1報（民間）の栄誉は宮古島の漁民に譲るとして、実は、わが国で日本海海戦と呼ばれている海戦は、海外では（国際的には）、「Battle of Tsushima（対馬沖海戦）」と呼ばれているように、対馬は、日清戦争でも重要な拠点だったが、日露戦争では、戦略的にも・戦術的にも決定的なポジションを占めていた。

近代日本における対馬の軍事施設の配置は、対馬南西岸にあるリアス式海岸・浅茅湾の奥に位置する竹敷港深浦に、明治19年（1886）、水雷施設部が設置されたことが始まりである。日清戦争当時は、この深浦に水雷艇隊基地が置かれ、海軍大尉・鈴木貫太郎（のちの海軍大将・侍従長・第2次世界大戦終戦時の内閣総理大臣）は水雷艇長として出撃して戦果を挙げ、水雷艇の重要性を世界に認識させる契機となった。この日清戦争後、基地としての重要性が高まり要港部に昇格したが、他の要港部が横須賀・呉・下関・佐世保・竹敷の5か所だったことから、対馬の重要性は明らかである。現在は、海上自衛隊対馬防備隊が置かれている。

こうして、南下政策をとるロシアとの戦争の危機に備えるべく、日本海軍は、竹敷港深浦に基地のある水雷艇を対馬海峡東水道に出撃させるため、対馬島の上島と下島の境で両岸の迫った箇所を貫通する久須保水道（現・万関瀬戸）の開削工事を、明治32年（1899）～明治34年（1901）にかけて行った。実際に日露戦争が始まると、当初は、旅順の攻防が中心だったが、それもこれも、ロシア艦隊への攻撃・圧力が主たる狙いだった。なかなか、旅順港から出てこ

ないロシア旅順艦隊にてこずりながらも、海陸からの旅順攻撃を繰り返し、膠着状態に入っていた。状況を一変させたのが、日本海海戦（明治38年（1905）5月27日）での決着である。

そもそも、ロシアのバルティック艦隊は、アフリカ南端・喜望峰を経てインド洋を横切り、7か月におよぶ航海の末に日本近海に到達した。かくも長き航海で、司令長官・ロジェストウェンスキー以下に、開戦前から、やや、疲労感が漂っていたことは想像に難くない。一方の日本海軍は、文字通りの日本近海での海戦でもあり、準備万端で待ち構えていた。ただ、待つ方にも、さまざまな逡巡はあった。ロシア・バルティック艦隊は、まだ大艦隊が残っているウラジオストックを目指すはずだが、果たしてそのルートは、「対馬海峡をくぐって日本海コースをとるのか、それとも、津軽海峡や宗谷海峡を経る公算もありうる」の、いずれか。

それによって、日本海軍の配置は大いに異なる。当時の日本海軍連合艦隊は、第一艦隊（戦艦三笠）の、司令長官・東郷平八郎大将、以下、参謀長・加藤友三郎少将、参謀・秋山真之中佐、参謀・飯田久恒少佐、参謀・清川純一大尉、副官・永田泰次郎中佐の下、戦術・対応策を練っていた。司馬遼太郎の『坂の上の雲』は、参謀・秋山真之の悩みと活躍を活写して人口に膾炙しているが、その意味で「敵艦見ゆ」の第1通報は民間であっても決定的に重要だったはずだが、真の第一発見（民間）は既述の通り活かされなかった。

さらに、これまで積み重ねて準備・開削した久須保水道（万関瀬戸）は、日露戦争では使われていない。なんとなれば、久須保水道（万関瀬戸）は、明治37年（1904）9月から、掘割拡幅のため、同水道は締め切られていたからである。現実には、日本海海戦に際しての連合艦隊の集結地は朝鮮半島南部の鎮海湾と定められ、そこから第一艦隊（戦艦三笠）に随伴して出撃した水雷艇隊は波が高かったため、対馬東岸（久須保水道の東口）の三浦湾に一時避難した。対馬西岸の浅茅湾の湾口に位置する尾崎湾に停泊中の第三艦艇付艇隊は、大口湾口を経て出撃している。

したがって、ロシア艦隊（旅順・ウラジオストック）の封じ込めを念頭に置いて計画された大規模な開削工事だったはずの久須保水道（万関瀬戸）は、結局は、肝心の日本海海戦では使われなかった。これを壮大な無駄と言ってしまえばそれまでだが、明治後期の日本を取り巻く緊迫した国際情勢への備えとして、対馬に海軍の基地を置くだけでなく、防衛力および攻撃力を高める観点から、さまざまな関連施設の配置と拡充を準備していた、当時の日本政府の意識の高さにはやはり脱帽するのである。

結びに代えて

上記の久須保水道（万関瀬戸）の工事費はいかほどだったのか、当時の予算書・資料で確認

すべく、明治 27 年（1894）～38 年（1905）の予算書・資料に目を通してみた。ただ、当時の資料はもはや学術的な歴史資料として存在するのみで、日本経済史家ではない私には、こうした二次資料に頼らざるを得ず、このような工事費用の費目・事項・箇所・金額は、発見・確認できなかった。推測するに、相当多額の金額と多数の工事関係者が関与していたと思われる。工事の主たる引き受け企業・業者も特定できていない。これらの点については、他日を期したい。

最後に、そもそも対馬（府中藩→厳原藩（明治 2 年（1869）8 月 7 日））は廃藩置県（明治 4 年（1871）7 月 14 日）では厳原県となり肥前・佐賀県と共に伊万里県（明治 4 年（1871）9 月 4 日）となった。その後、この伊万里県に、明治 4 年（1871）7 月 14 日設置の唐津県、小城県、蓮池県、鹿島県が明治 4 年（1871）11 月 4 日に合併されるも、翌明治 5 年（1872）8 月 11 日に対馬国は長崎県に移された。対馬はそれ以来、長崎県に属しているが、その経緯についても、地理的・海上交通の流れなどを踏まえた時、自然の成り行きなのかどうかについても、やや疑問を感じた。素人が地図上から見ると、どう見ても、対馬は長崎県ではなく、佐賀県や福岡県との関係性が高いように見受けられるのである。廃藩置県の設定には、当時、少なからざる深謀遠慮が働いていたことは確かではあるが、明治・大正・昭和前期・昭和後期・平成を経てみると、往時の事情は茫々として幽明の彼方に入りつつある。これらの点の解明も、今後の課題としたい。

参考文献

- 一般社団法人・対馬観光物産協会（2017 年 3 月入手）『対馬歴史観光ガイドブック～国境の島
交流と国防の最前線～』
- 坂入長太郎（1988）『明治後期財政史～産業資本主義確立期における財政の政治過程（明治 24
年～大正 3 年）～』酒井書店
- 司馬遼太郎（1972）『坂の上の雲』文藝春秋
- 三谷太一郎（2017）『日本の近代とは何であったか～問題史的考察～』岩波新書
- 松尾正人（1986）『廃藩置県～近代統一国家への苦悶～』中公新書
- 室山義正（2014）『近代日本経済の形成～松方財政と明治の国家構想～』千倉書房